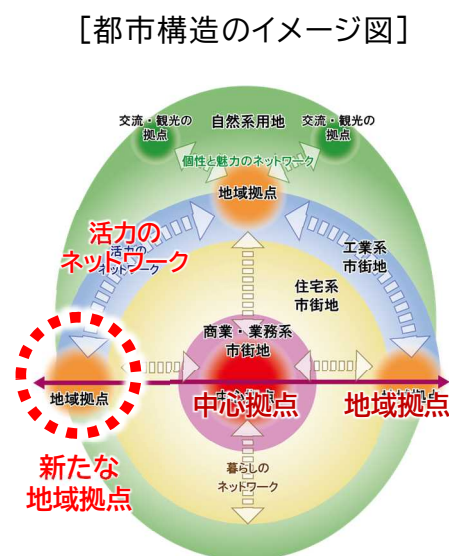
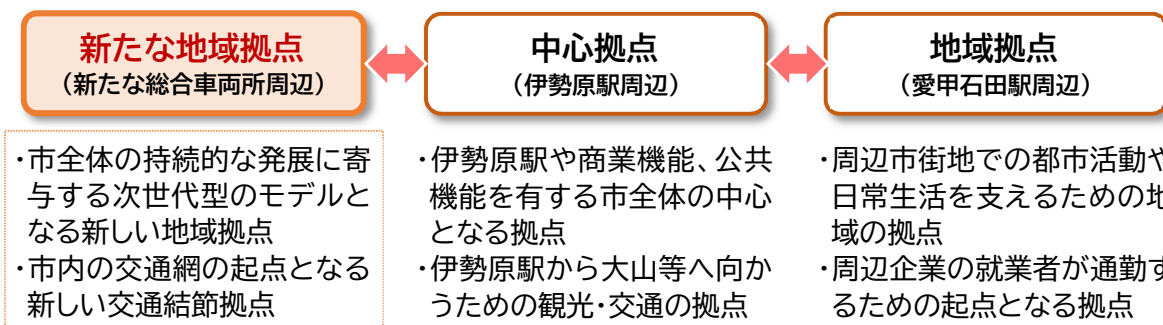


伊勢原市と小田急電鉄㈱が令和5年3月に締結した「持続可能なまちづくりを推進する連携協定」に基づき、「都市計画道路田中笠窪線整備事業」と「新たな総合車両所建設計画」を契機として、新たな産業都市軸の形成やスマート新駅の検討など、『新たな地域拠点』の創出に向けた持続可能なまちづくりの検討を進めています。

(1)『新たな地域拠点』の位置づけ

- 市内には中心拠点（伊勢原駅周辺）と地域拠点（愛甲石田駅周辺）の2つの既存拠点があります。伊勢原市都市マスタープラン（令和7年3月改定）では、「新たな総合車両所」の建設計画に伴い、周辺地域の現状や将来的なニーズの拡大などの課題に対応するための『新たな地域拠点』を位置づけ、新しいまちづくりの検討を進めています。
- 『新たな地域拠点』の創出にあたっては、それぞれの拠点性が失われないよう、各拠点の強みを活かした役割分担とともに、市街地や地域資源がコンパクトにまとまった都市構造を維持し、各拠点が相互に連携した持続的な発展を目指します。



【資料】伊勢原市都市計画マスタープラン

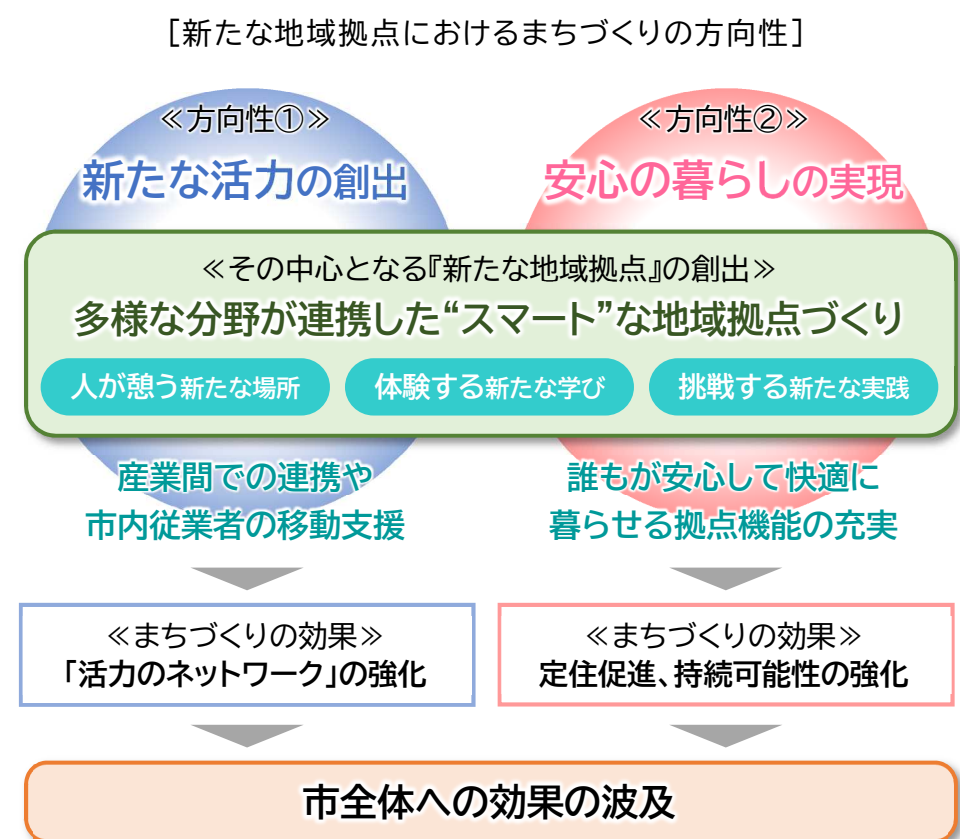
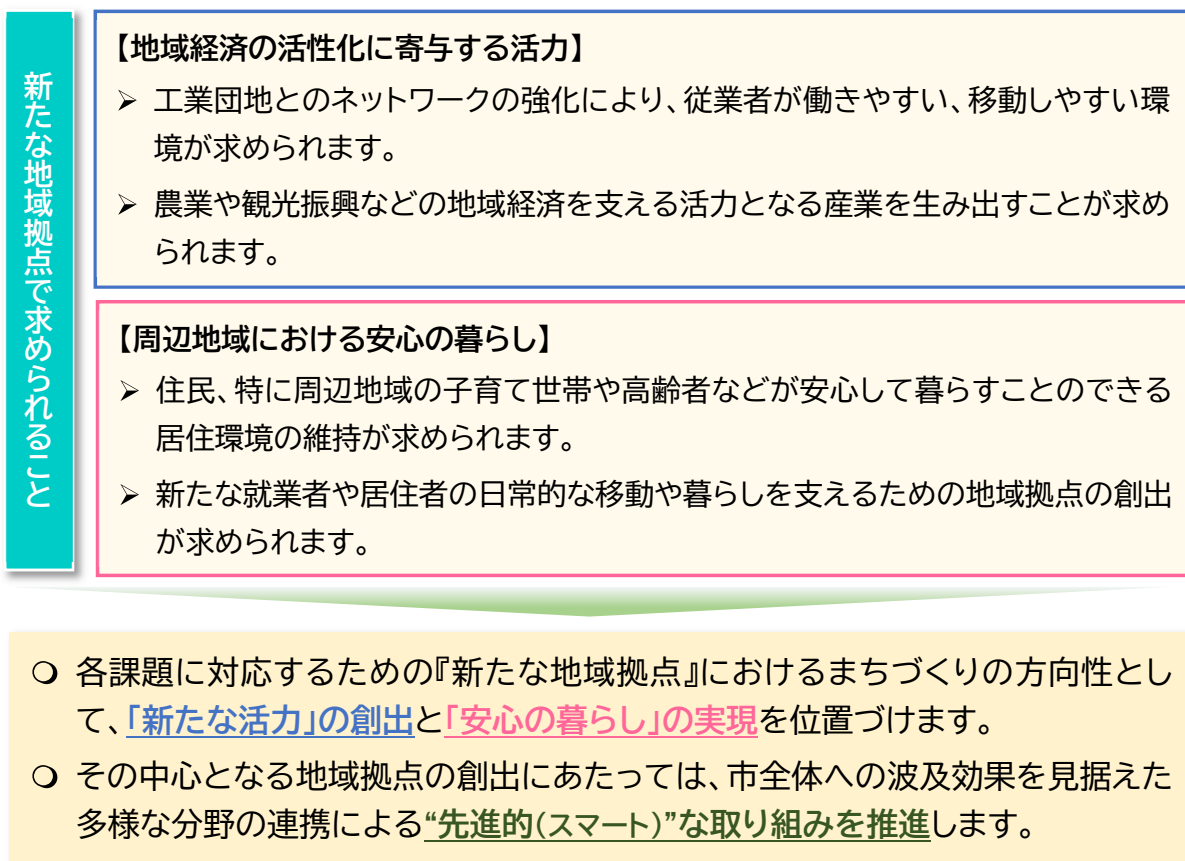
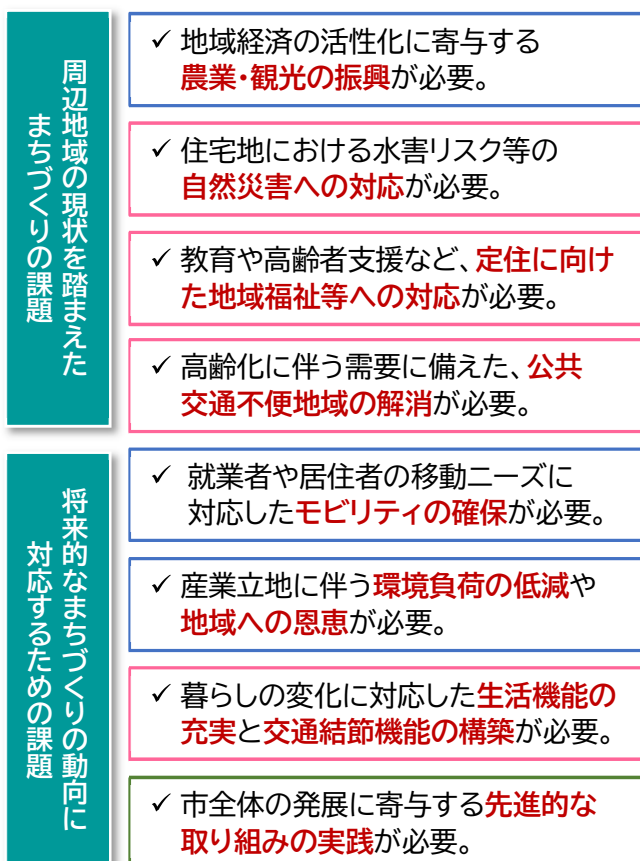
- 拠点ごとに位置づけを差別化することで、利用者の平準化と既存機能の維持を図ります。

(2)「新たな総合車両所」周辺の概要

- 「新たな総合車両所」の周辺は、工業団地や農地、住宅地などが広がる地域です。
- また、その北部では、東名高速道路の「伊勢原大山インターチェンジ」の開通に伴う新たな産業集積も予定されています。



(3)『新たな地域拠点』におけるまちづくりの方向性



(4)『新たな地域拠点』の将来イメージ※

- 各拠点との役割分担や、まちづくりの方向性を踏まえた、『新たな地域拠点』の将来イメージを示します。
- イメージの検討にあたっては、“どのような人々が、どのように暮らしたり、活動したりすることができるのか”という視点から、多様な分野が連携し、拠点機能を充実させるための「3つのテーマ」を設定しました。

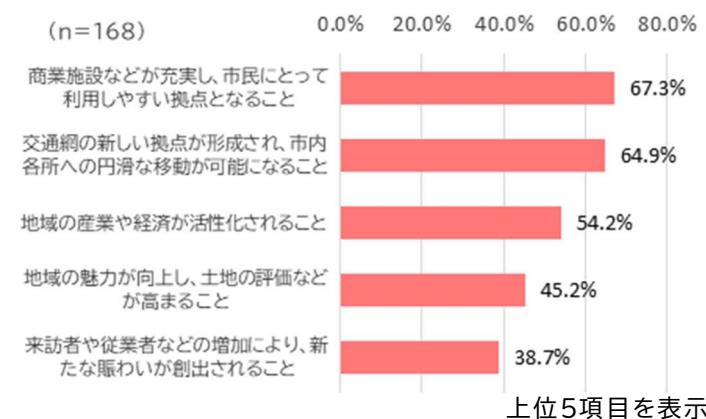
近隣で暮らす 居住者 にとっては…

- ・拠点機能の充実により、高齢者や子育て世帯が安心して暮らすことができる
- ・『新たな地域拠点』の周辺で働くことで、職住近接の暮らしができる
- ・交通結節点や新たな生活モビリティサービスなどを利用して、自家用車に頼らずに多方面へアクセスすることができる
- ・地域学習として、新たな総合車両所などの最先端の産業施設を見学・体験することができる



[地域住民の意向]※1

総合車両所の移転計画地周辺のまちづくりに対し、期待することは何ですか。(複数選択)



※1：資料：伊勢原市総合車両所の移転計画地周辺のまちづくりに関するアンケート調査結果（調査期間：令和7年1月下旬～2月下旬）

※2：「生活モビリティサービス」とは、日常生活の移動を支援するため、自動運転技術などを活用して、地域や個人のニーズに合わせた移動手段を提供する仕組みです。

※3：「EV車両（電気自動車）」とは、充電した電気で走行する環境にやさしい車で、災害時には非常用電源として家庭や避難所に電力を供給することができます。

※4：「スマート農業」とは、AIやドローンなどの最新技術を活用し効率よく農作物を育てることで、農業の担い手不足や高齢化に対応した次世代の農業スタイルです。

※5：「農鉄連携」とは、鉄道と農業が協力し、地元産の農産物を駅で販売したり、貨物輸送に鉄道を活用したりして、農業振興や地域活性化を目指す取り組みです。

出典：photoAC（各種イメージ画像）、日産自動車㈱（福島県浪江町）、日本交通計画協会「都市と交通」通巻74号（広島県廿日市市）、福岡モビリティショー（小型コミュニティEVバスのイメージ）、北陸・信越観光ナビ（トレインパーク白山）

※このイメージ図は、新たな地域拠点の創出に向けた研究会等での検討内容を基に作成したものであり、配置や機能、実施事業などについて確定したものではありません。

多様な分野が連携し、拠点機能を充実させるための「3つのテーマ」

① 居住者や就業者などの“人が憩う”新たな場所

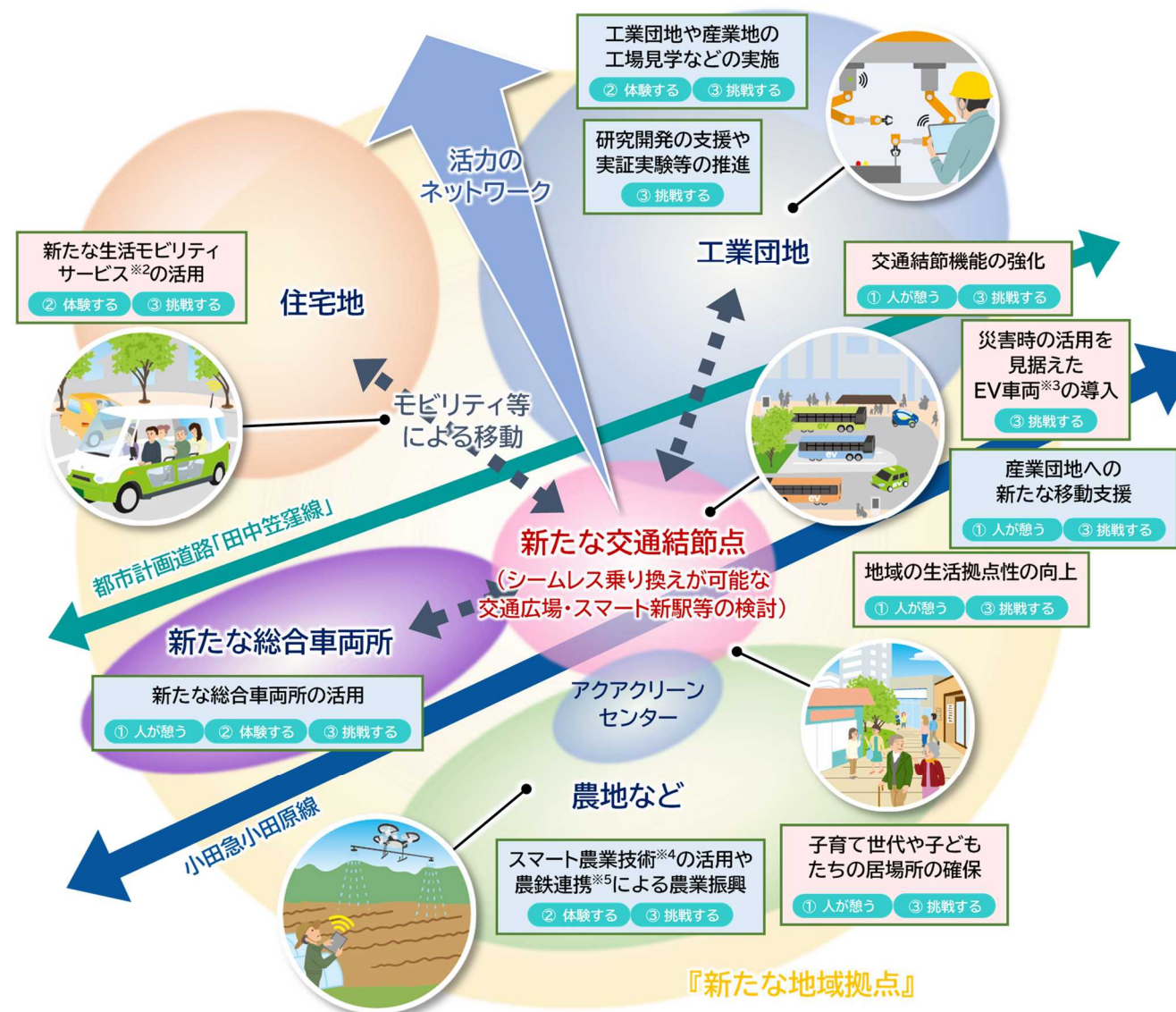
- ▶ 例) 暮らしを支える生活機能、日常的に人が集い交流を生む施設 などの検討

② 産業の集積により“体験する”新たな学び

- ▶ 例) 地域の産業を学ぶ施設見学、地域の魅力を知る情報発信 などの検討

③ 最先端技術を活用して“挑戦する”新たな実践

- ▶ 例) 次世代型の新たな交通結節機能、企業等による実証実験 などの検討



工業団地や企業の 従業者 にとっては…

- ・交通結節点や「活力のネットワーク」を担う新たな移動支援を利用して、工業団地への通勤や公共交通の乗り換えをシームレスに行うことができる
- ・拠点内の快適な屋外空間などで、自由時間を過ごすことができる
- ・マイクロモビリティなどを使って、拠点内を自由に移動することができる



地域内に立地する 企業・事業者 にとっては…

- ・地域拠点の公共空間を使って、次世代型のモビリティや自社開発サービスなどの実証実験などに挑戦できる
- ・実証実験や研究開発の実践を通して、企業のPRや信頼性、技術力などを発信することができる
- ・最新技術を活用して、『新たな地域拠点』の利用者などに関するデータを収集することができる



地域を訪れる 来街者 にとっては…

- ・観光や地域学習として、新たな総合車両所などの最先端の産業施設を見学・体験することができる
- ・自然と触れ合い、気軽に農業を体験することができる
- ・自動運転車両などの新たな移動支援を利用して、効率的に各種施設やサービスを体験することができる

